

文明キャベツ

私が大学で学んだのは、美術ではなくて水産資源学という学問です。進歩した漁船や魚具で魚を根こそぎとった結果、間もなく魚はいなくなったという事例を学びました。そこで驚いたのは、自然こそ偉大と思っていたのに、人間が造ったものが自然を脅かす程の圧倒的パワーを持ち始めたということです。文明は間違うととんでもないことを仕出かすことが分かりました。

文明は進み、地球温暖化や環境汚染等の深刻な問題が次々にあらわれるようになりました。私はそれらの何れにも深い関心があり、不安はつのるばかりでした。身近なことで云えば、この前の暴風のときなど、凄い台風が来るという予報でしたので、堅固なビルに住んでいる友人宅に避難した程です。

更に追い打ちをかけるかのように、文明病といわれるコロナが世界を席卷したのです。皆マスクを掛け、ひっそりと暮らす異様な風景が出現しました。ひたすら便利なユートピアを目指した文明だった筈なのに、親子・兄弟でも自由に会えない不便極まりない世の中になってしまいました。速ざかっていた「神のたたり」という言葉が一瞬脳裏をよぎります。

私達はどう対処したらよいのか、それは地球規模の問題であり、逃げ出すことは出来ないのです。謙虚に向き合い、文明の好ましい有り様を模索する外はありません。

私は急激な文明の進歩に対する疑問から、疑問そのものをテーマとし、タイトルを「文明キャベツ」として表現活動を始めて37年になります。モチーフはキャベツでした。何故キャベツかとよく聞かれるのですが、それは、大きな葉が命を包み込むように、一枚一枚重なり合って大きな玉になっているのにユーモアすら盛じたことと、何と云っても、あの大小の葉脈です。葉脈を血管に見做すと、キャベツは血管剥きだしの生き物と化し、恰も現代科学の飽くなき探求に曝された命の象数にも見えたことです。

このテーマは変わらず今後も続けるつもりです。それはささやかですが、文明に対する私なりの向き合い方なのです。

齋藤秀三郎